

巻頭法話

自分固有の生きる世界

八正道は解脱を目指して進む

Straight path to liberation

(女神の問い)

「天女の群が（歌声を）響かせ

鬼の群に馴染まれた

その林は愚痴^{ぐち}と呼ばれる

どのようにして活路があるか」

(出家仏弟子の答え)

「その道は『真直』と呼ばれ

その方向は『無畏^{むい}』と呼ばれ

車は『音の無いもの』と呼ばれ

諸法輪^{しよほうりん}をそなえている

慚^{ざん}はその制御具

念^{ねん}はその囲いなり

法^{ほう}を御^{ぎよ}と私^しは言う

正見^{しやうけん}はその先導者なり

女性であれ、男性であれ

かかる車をそなえるならば

かれこそこの車によって

すでに涅槃の近くにあり」

Accharāsuttaṃ SN 1.46

天女経（相應部 一、四六）

“Accharāgaṇasaṅghuṭṭhaṃ, pisācagaṇasevitaṃ;
Vanantaṃ mohanaṃ nāma, kathaṃ yātrā bhavissatī”ti.

“Ujuko nāma so maggo, abhayā nāma sā disā;
Ratho akūjano nāma, dhammacakkehi saṃyuto.

“Hirī tassa apālambo, satyassa parivāraṇaṃ;
Dhammāhaṃ sārathiṃ brūmi, sammādiṭṭhipurejavaṃ.

“Yassa etādisaṃ yānaṃ, itthiyā purisassa vā;
Sa ve etena yānena, nibbānasseva santike”ti.

（日本語訳：片山一良『パーリ仏典〈第3期〉1 相應部（サンユッタニカーヤ）
有偈篇Ⅰ』大蔵出版より ※下線部を改訳）

人の生き方

ブツダの教えを通して、人の生き方を二つに分けることができます。一つは、世間で認められる生き方です。もう一つは、仏教が推薦する生き方です。

どんな生き方を選んでも、自分ひとりの判断で正しく生きることとはできません。生き方を学ばなくてはいけないのです。世間は、世間の役に立つ生き方を期待します。世間の役に立たない人々にとって、この世は生きづらいところになります。世間が、まるで自分に攻撃をしかけてくる組織のように見えるのです。実際のところ、世間は役に立つ人ならばサポートしますが、役に立たない人に対しては無関心です。社会から見放された人に、この世で生きることとはできません。人は誰でも、社会の役に立つ生き方をしなくてはいけないのです。社会の役に立つ人は、この世で問題なく生きられます。「役に立つ」という言葉は、「仕事」という言葉に入れ替えることができます。人にやるべきことがあるならば、その人はこの世で問題なく生きられます。やるべきことが何もない場合は問題が起こるのです。

生き方の善悪

一人ひとりに、役に立つ生き方、または仕事があるならば、問題は起きないように見えます。しかし、この世の中には犯罪に手を染めるグループもいるし、テロ行為を企てる人々もいるのです。法律と道徳を無視して、わがまま好き勝手に生きる人々も存在します。そのような生き方をする人々が増えると、社会が全体的に不安定になります。収入を得られるかも知れませんが、人がやってはいけない仕事もあるのです。世界各国は法律を定めて、やってはいけない仕事をする人々を取り締まっています。それでも、違法行為は跡を絶ちません。国の法律によって、善行為のみをする人々を育てることはできないのです。

もちろん、正しい生き方もあります。自分の役に立ち、社会の役に立つ生き方は、正しい生き方だと言えます。とはいえ、個人だけの力で正しい生き方を理解して実行するのは難しいことです。人間という生命体は、先輩から生き方を学んで実行するという特性を持っています。輪廻のなかで、人間として生まれるのは幸福なことである」というのが、仏教の一般的な考えです。人間界に生まれるのは、とても稀な出来事であるとも説かれています。「学ぶこと、人格向上、存在の次元を超えることなどは人間にしかできない」という考えもあります。

感情に身を任せて生きる人は、人間として退化してしまいます。理性にもとづき善悪の判断をして、よい生き方を選ぶ人々は進化します。ここで進化というのは、こころの成長であり、人格向上です。人間として生まれても、最期にはすぐれた人間にならなくてはいけないのです。感情に身を任せて生きると徐々に不幸になっていくので、死後も不幸に陥ると言えます。人は

正しい生き方を選んで実行するべきです。そのために、善悪の区別を学ばなくてはいけないのです。自分の幸不幸は、自己責任であると理解するべきです。

ある女神の観察

ある女神が、森の中でひとり静かに修行に励んでいるブツダの出家弟子を見つけました。

人間の立場から見ると、修行を志す人々は煩わしい社会から出て、ひとけ人気のない森に入って修行に精進するのです。人間にとって、森は静かで煩わしくはない場所だからです。そこでは、群衆の声や踊り、音楽の音などは聴こえてきません。したがって、修行者に適した場所になります。

一方、この女神にとっては、自分が住まう森は大都會のような場所でした。その女神にとって、森に隠れて一人静かに寂しく生活するという発想はなかったのです。ここで、あいごと相異なる二つの次元に生きる生命について考えてみましょう。女神は、自分が属する生命体の次元で生きています。人間もまた、人間という生命体の次元で生きています。人間に見える森は、他の生命の煩わしさがなく静かなところです。女神に見える森は、霊的な存在が集住する大都會のような場所なのです。

そんなわけで、女神は修行のため森に入った比丘を見て、おかしいと思ったのです。お祭りやお遊びなどで大騒ぎしている神霊たちの大都會に来て、この出家者が何をやっているのだろうか

と。「修行したければ、もつと静かな場所に行くべきじゃないの？」と訝うづかしんだことでしょう。どうやらこの女神は、自分に見える世界、自分の住まう世界が、他の生命にとっても同じく見えるのだと勘違いしていたようです。

自分の世界

各生命は、自分固有の世界に生きています。自分が生きる世界環境（環世界）はよく知っているけれど、他の生命が生きる世界環境のことは知らないのです。

違う生命が同じ場所を共有すると、そこで問題が起きます。人家に棲むゴキブリは、自分にとって過ごしやすい、気持ちのよい環境を作ろうとします。それは家に住まう人間にとっては、不潔で耐え難い環境になるのです。そこで、人間がゴキブリ退治に血道を上げます。ゴキブリたちも、人間に隠れて生きる方法を探すのです。人間は時々、他の生命の生きる環境を破壊するために殺虫剤、除草剤などを撒いたりします。ウイルスやバクテリアなども、他の生命の環境を破壊して増殖します。人間も、その攻撃を受けていますね。

生命は自分の生きる環境を守るため、他の生命の生きる環境を破壊するのです。生命同士が、互いに協力しあって生きる環境などはほとんど見当たりません。酒や発酵食品などは、他の生命（微生物）の生きる環境を助けることで、人間が利益を得ているケースだと言えるでしょう。

それぞれの生命組織は、自分にふさわしい世界環境をつくって生きています。しかし、他の生命の生きる環境について、理解することはないのです。家に棲むゴキブリを殺虫剤で殺すことはしても、ゴキブリたちが幸せに生きられる環境を分けてあげることは決してしないのです。これは、ゴキブリの生き方が人間にとって迷惑だと思っているからです。一方で、犬・猫などペットのためならば、過ごしやすい環境をつくってあげるのです。ペットを育てることで、人間が楽しみを感じるからです。

この經典に出てくる女神は、自分が住む環境のことしか知らなくて、人間もまた人間固有の異なる環境で生きている事実を理解していなかったのです。それは明らかに勘違いです。人間も時々、ソファで犬を抱っこしながらテレビを観たりしますね。その時、自分はワンちゃんと一緒にテレビを観ているのだと勘違いするのです。人間が人間固有の世界でテレビを観ている時、犬は同じソファで寝そべりながら犬固有の世界を生きています。テレビで流れるドラマは、犬にとってなんの関係もないのです。

女神の質問

女神にとって、森は大都会です。そこに出家が入ってきて、修行に励んでいる。見るからにおかしなことです。そう思った女神には、「神々の世界は人間に関係ない」ということがわかって

いなかったのです。人間にとって森は静かな場所です。俗世間の煩わしいことは一つもない、修行する人に適した環境なのです。それを理解できない女神に、ふつふつと疑問が生じたのです。

この森は、天女 (アツチャラー *accharā*) たちの群れが大騒ぎしながら遊んで生活する場所です。要するに、神霊たちの大都会です。そこには、格の高い神々だけではなく、格の低い奴隷のような霊たち (ビスーチヤ *pisāca*) もいます。人間にとっては森 (ワナンタン *vananta*) かも知れませんが、霊たちにとっては落ち着けない、騒がしいところです。森とは、無知 (感情) が支配する環境です (*vanantam mohanam nāma*)。『貪瞋癡の感情に支配されたこの騒がしい場所において、あなたはどのようにって輪廻を乗り越えるつもりなのか?』これが女神の発した質問でした。

修行者の答え

修行者は、女神の質問の内容から、彼女が各生命の生きる環境について正しく理解していないことを見抜いたのです。(あなた方にとっては大都会かも知れませんが、私たちにとっては静かな森なのです。)

相手の理解能力を考えると、環境の問題を説明するのはどうやら時間の浪費になりそうです。そこでアプローチを変えて、自分は必ず結果が出る、完全なプログラムを実行しているのだと教えてあげれば、女神も落ち着くことでしょう。そう考えた修行者は、女神に向かって次のように

答えました。

自分は解脱という境地を目指して、修行という旅に出ています。解脱への道は、まっすぐです。分かれ道はないので、安心して進めばよいのです (ujuko nāma so maggo)。俗世間の生き方は感情にまみれているので、不安、怯え、失望、落ち込みなどのトラブルがあります。しかし、解脱の道は安穩に向かって進みます (abhayā nāma sā disā)。乗り物（修行）に「揺れない」と名づけています (ratho akujāno nāma)。法輪（八正道）が車輪です (dhammacakkehi samyuto)。慚が車のブレーキ装置です (hiṇṭ tassa apālambo)。気づきが車を囲う手すりです (satyassa parivāraṇam)。法（仏法）をわたしは御者と呼びます (dhammāhaṇ sārathīṇ brūmi)。正見をわたしは動力と呼びます (sammāditthipurejāvaṃ)。このような乗り物に乗っている者は、女性であろうが、男性であろうが、必ず涅槃へ向かうのです (yassa etādisaṃ yānaṃ, itthiyā purisassa vā; s a ve etena yānena, nibbānasseva santike)。

女神は、修行者もまた自分と同じ環境で生きていると誤解したのです。確かに、女神は欲にまみれた騒がしい環境で生きていました。しかし、修行者にはそれは関係ないことです。修行者にとって、森は静かな場所なのですから。

あなたは樹の下に座って、蟻塚を観察しているとイメージしてみてください。人間に見えるのは、アリが列をなして塚に出入りする姿だけです。しかし、蟻塚の中を覗いてみたら、別世界が現れます。女王アリ、働きアリ、兵隊アリ、お世話係のアリなどがいて、分業体制の複雑なアリ社会が構成されているのです。自分が生きる環境から、他者の生きる環境を判断することは

不可能です。人間にとってのただの蟻塚であっても、アリたちにとってはそれが生きる世界なのです。

それと同じように、女神にとっては感情を中心にした猥雑で都会的な環境であるはずの森が、修行者にとっては静かな場所だったのです。それぞれの生命が生きる世界環境（環世界）の問題について、この女神に教えてあげようとしても時間の無駄になりそうです。そこで、出家者は別な答えを示したのです。環境の問題を気にする必要はありません。自分は、しっかり完璧にできあがった八正道という車に乗っています。進む道はまっすぐで、ゴールは解脱です。だから、心配することはないとつもありません。自分はただ、安心して修行すればよいのです。修行するのは、八正道という車を前に進めることです。この車に乗る人は誰でも、解脱・涅槃というゴールに達するのです。

今月のポイント

- 各生命はそれぞれ固有の世界環境（環世界）に生きています。
- 他の生命が生きる環境を非難するべきではありません。
- 自分の価値観で他を判断することはできません。
- 道徳を守ることで人間にレベルアップすることができます。
- 執着を捨てることで生命次元を乗り越えられます。